

---

# 銀河英雄伝説～ラインハルトに負けませんシリーズの外伝や各種設定

三田弾正

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けませんシリーズの外伝や各種設定

### 【Nコード】

N4827Y

### 【作者名】

三田弾正

### 【あらすじ】

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません  
銀河英雄伝説～門閥貴族・・・だが貧乏！  
において使用するかもしれないタイトルや  
設定人物などを追々追加する予定です。  
又外伝等も掲載します。

## 旗艦艦名録（前書き）

設定資料等を追々追加予定です。

## 旗艦艦名録

作中艦名

原作艦名

ヴェルザンディ (Verzandi) - 運命の三女神の次女で現在を司る - パーティバル (Parcivale)  
 皇帝御召艦  
 ザンディ 級一番艦  
 ヴェル

クリエムヒルト (Chriemhilt) - ブルグント族の姫君 -  
 皇太子御召艦  
 改ブリ  
 ユンヒルデ級二番艦

アマテラス (Amaterasu) - 日本の主神、太陽神 -  
 皇女御召艦  
 ブリュ  
 ンヒルデ級二番艦

ラプンツェル (Rapunzel) - ノヂシャ - チシャ -

ラプン

ツェル 級一番艦  
 480年4月竣工  
 レギンレイヴ級に似た船体にヘルヴォル級の艦首を繋いだような形  
 機関はレギンレイヴ級同等側面機関4基を左右のエンジンポットに  
 配備

エンジンポットは大型で船体や後部格納庫を守っている  
ヘルフィヨトル級同等機関2基を船体側面に配備

主船体後部のエンジンは無くその部分がワルキューレ格納庫として  
延長されている。

搭載機数80機

全長1180m

塗装は蒼色

ヴァナヘイム（Vanahheim） - 北欧神話に登場するヴァン  
神族の国 -

ラプ

ンツエル級二番艦

483年竣工予定

ワルキューレに変わり雷撃艇格納庫にしている

搭載機数40艇

全長1190m

塗装は灰色

ヴィルヘルミナ（Wilhelmina）

グレゴール・フォン・エッセンバツハ子爵

ヴィル

ヘルミナ級

ブリュンヒルデ（Brunhildr） - 勝利のルーンに通

じる者・ブリュンヒルト（Br?nnhild）

ラインハルト・フォン・シェーンヴァルト男爵

ブリュ

ンヒルデ級一番艦

バルバロッサ (Barbarossa) - 赤髭 -  
ジークフリード・フォン・キルヒアイス帝国騎士  
改ブリ  
ユンヒルデ級一番艦

スケゲル (Sc?gul) - 戦 -  
ウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ帝国騎士  
ゲイレ  
ルル級二番艦

ランドグリーズ (Randgri?) - 盾を壊す者 - トリス  
タン (Tristan)  
オスカー・フォン・ロイエンタール帝国騎士  
レギン  
レイヴ級二番艦

レギンレイヴ (Reginleif) - 神々の残された者 -  
ベリオ・ウルフ (Beio-wolf)  
ウォルフガング・ミッターマイヤー  
レギン  
レイヴ級一番艦

ゲイルスケゲル (Geirsc?gul) - 槍の戦 - ケーニ  
ヒス・ティーゲル (Knights Tiger)  
フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト  
ゲイル  
スケゲル級一番艦

ヘルフィヨトル (Herfi?tur) - 軍勢の戒め - クヴ

アシル (Kvasir)  
エルネスト・メックリンガー  
イヨトル級一番艦

ヘルフ

アルヴィト (Alvitr) - 全知・フォルセティ (Forsetti)  
ウルリツヒ・ケスラー  
アルヴ  
イト級一番艦

スルーズ (?r??r) - 強き者・スキルニル (Skirnir)  
コルネリアス・ルッツ  
アルヴ  
イト級二番艦

フリスト (Hrist) - 轟かす者、援軍・サラマンドル (Salamandor)  
アウグスト・ザムエル・ワーレン  
アルヴ  
イト級三番艦

スケツギオルド (Sceggild) - 斧の時代・ヨーツンハイム (Jotunheim)  
カール・グスタフ・ケンプ  
スケツ  
ギオルド級一番艦

ラーズグリーズ (R??gri?) - 計画を壊す者・ガルガ・

ファルムル (Garga Falmul)  
ヘルムート・レンネンカンフ  
スケツ  
ギオールド級二番艦

ゲンドウル (Gondur/G?ndul) - 魔力を持つ者  
- ヴィーザル (Vissarr)  
エルンスト・フォン・アイゼナツ八帝国騎士  
ゲンド  
ウル級一番艦

ヘルヴォル (Hervor) - 軍勢の守り手 - リューベック  
(L?beck)  
ナイトハルト・ミュラー  
ヘルヴ  
オル級一番艦

ゲイレルル (Geir?lul) - 槍を持って進む者 - アー  
スグリム (Ahsggrim)  
アーダルベルト・フォン・ファーレンハイト帝国騎士  
ゲイレ  
ルル級一番艦

イーヴアルデイ (?valdi) - 大力無双の者 - フォンケル (V  
onkel)  
カール・ロベルト・シュタインメッツ  
イーヴ  
アルデイ級一番艦

フレック (Hl?cc) - 武器をがちゃつかせる者 -



レギナルト・フォン・ケルトリング侯爵  
レギン  
レイヴ級三番艦

エルルーン (?lrun) - ビールのルーン文字に通じる者 -  
カールハインツ・フォン・シュタイエルマルク男爵  
アルヴ  
イト級四番艦

スクルド (Sculd) - 運命の三女神の三女で未来を司る -  
エルンスト・シュムデー  
ヘルヴ  
オル級二番艦

ベルヴェルク (berverk) - 禍を引きおこす者 - エイストラ  
(Eistla)  
アルフレット・グリルパルツァー  
ベルヴ  
エルク級一番艦

タンゲニズル (Tanngn??r) - 歯ざしりする者 - ウールヴ  
ルーン (Ulf run)  
ブルーノ・フォン・クナツプシュタイン帝国騎士  
ベルヴ  
エルク級二番艦

グルヴェイグ (Gullveig) - ヴァン神族の一員の女神「黄金の力」 - ニュルンベルク (N?rnberg)  
カール・エドワルド・バイエルライン  
グルヴ  
エイグ級一番艦

グルファクシ (Gulfa xi) - 金のたてがみ - キュクレイン  
(Cuchlainn)

ドロイゼン

グルフ

アクシ級一番艦

グリンブルステイ (Gullinbursti) 猪 - バレンダウン  
(Balendown)

ヴァーゲンザイル

グリン

ブルステイ級一番艦

今後両作品で使用するかも知れないタイトル（前書き）

此方へ移しました。

今後両作品で使用するかも知れないタイトル

兄の名は

皇帝からの物体X

領地を貰おう

無知との遭遇

マリファナ畑で捕まえて

ロリとの遭遇

ロイエンタールはロリエンタール？

アルレスハイムで石蹴りを

サルベージ大作戦

みたか野伏釣り戦法

ジジイの恐怖

オーベルシュタイン恐怖の正体

ヤン戦法を予習せよ

叔母の秘密

支度金50万マルク

後宮への道

エヴァはエヴァでもエヴァ違い

原野商法

掘れなければ、砕けばいい

黒猪襲来

士官学校学園祭

魔術少女リリカルらみでいあ  
フォークとロボスは使いよう  
任天堂大作戦

ホーランドさんいらっしやーい  
ヤンとの遭遇

アンネローゼを探せ

フレーゲルをぶっ飛ばせ

原始人と一緒

韜晦作戦準備よし

皇太子の死

甥誕生

戦艦を貰おう

お見合い大作戦

その名も大公妃

シユールストレミング大作戦

やばい文書を受け取ろう

刃物女とお友達

理屈倒れで論破せよ

守って守護ギョウター

宮崎のどか作戦

遠足はイゼルローン

イゼルローンの嵐

キルヒアイスアタック

勇者達の帰還

芸術家をゲットせよ

エル・ファシル真の英雄

新婚さんいらっしやーい

引越はローエングラム

シェーンコップ男爵

新造空母プロメテウス

提督達の休日

密輸でボロ儲け

競馬場の決戦

原始人と遊ぼう

トリューニヒトで遊ぼう

偽スパイを作成せよ

イゼルローン要塞特殊作戦室

自由惑星同盟大混乱作戦

疑心暗鬼を植え付けよう

ゴキブリ<sup>ペイ</sup>野郎をおちよくろう

カストロプ動乱で昇進だ

赤金暗号丸判り

帝国暦480年度人名辞典帝国簡易版（前書き）

取りあえず此で追々追加していきます。

## 帝国暦480年度人名辞典帝国簡易版

帝国版です

テレゼ・フォン・ゴールデンバウム 主人公471年2月3日～  
10歳時身長148cm 視力2.0 髪の色黒っぽい栗色 目の色はブルー

普段からチタン合金製骨組みで布部分がケブラー繊維の扇を所持。  
悪魔、魔王、黒真珠などと、渾名は事欠かない腹黒皇女。

変装時は『ヴァネッサ・フォン・リヒトホーフェン』と名乗る。容姿(変装版)は金髪ストレート、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル似 CV田村ゆかり

フリードリヒ4世 皇帝テレゼの父 424～ 強いぞ陛下、名君に成りつつあります。

CV阪脩

シュザンナ・フォン・バーネミュンデ侯爵夫人 フリードリヒ4世  
寵姫でテレゼの母親452～

原作に比べて非常に穏やか、事件を起こす心配なし。CV藤田淑子

ケルトリング侯爵家のクラリッサ嬢 471～ 体力自慢、大らかブリキッテとは腐れ縁。

リリカルなのは、シャッハ・ヌエラ似 CV阪田佳代

エーレンベルク元帥子爵の曾孫のブリギッテ嬢 471～ 体力自慢、負けず嫌い、



クラリッサとは腐れ縁。曾祖父と早朝ランニングしてます。

リリカルなのは、アリサ・バニングス似　CV釘宮理恵

メクレンブルク伯爵家のヴィクトーリア嬢　471〜　ごく普通の貴族の娘、

オットリタイプ　一番体力がない。

リリカルなのは、デイド似ているが姿だけ。　CV伊藤静

リヒテンラーデ侯爵家エルフリーデ嬢　471〜　原作の刃物女  
この世界ではオットリお嬢様　大叔父のリヒテンラーデ侯爵家の養女に成っている。

CV富沢美智恵

グリーンメルスハウゼン子爵家のカロリーネ嬢　471〜　忍者みたいな者　養女

喋り方は冷静沈着　ネギま！？の長瀬楓似　CV白石涼子

ルドヴィヒ・フォン・ゴールデンバウム　皇太子　出番が殆ど無い影が薄い皇太子。

ヘレーネ　バーネミュンデ侯爵邸のメイド

クラリッサ　バーネミュンデ侯爵邸のメイド

アンネローゼ・フォン・グリューネワルト 462 〱 フリード  
リヒ4世寵姫

ラインハルト・フォン・ミューゼル ラインハルト・フォン・シ  
エーンヴァルト  
467 〱

本来の主人公。後にシェーンヴァルト男爵叙爵。  
バトルジャンキー

ジークフリード・フォン・キルヒアイス 467 〱 叙爵後

エーリツヒ・フォン・キルヒアイス ジークの父  
元司法省官吏、現在憲兵隊嘱託

オットー・フォン・ブラウンシュヴァイク 公爵

アマーリエ・フォン・ブラウンシュヴァイク公爵夫人 フリードリ  
ヒ4世第一皇女

エリザベート・フォン・ブラウンシュヴァイク オットーの娘  
皇位継承権第3位

ヨアヒム・フォン・フレーゲル男爵 462 〱  
熱砂の惑星で勉強中、結果的に島流し。

ウィルヘルム・フォン・リッテンハイム 侯爵

クリステイーネ・フォン・リッテンハイム侯爵夫人 フリードリ

ヒ4世第二皇女

ザビーネ・フォン・リッテンハイム      ウィルヘルムの娘    皇  
位継承第4位

ベアトリクス・フォン・マリンドルフ伯爵夫人      ヒルダの母  
さん

ヒルデガルド・フォン・マリンドルフ      468〜

マルグリート・フォン・ヴェストパーレ男爵夫人

マグダレーナ・フォン・ヴェストパーレ      460〜      メックと知  
り会わなかった。

480年男爵家相続

アルフレッド・フォン・ランズベルク伯爵      463〜

装甲擲弾兵副總監オフレッサーに弟子入り

ロベルト・フォン・ヒルデスハイム伯爵令息      462〜      アホ貴族  
の代表      陛下に怒られた。  
継承権剥奪

イングヒルト・フォン・ヒルデスハイム伯爵令嬢      459〜      次期  
ヒルデスハイム伯爵夫人

ヘルクスハイマー伯爵      有名な指向性ゼツフル粒子発生装置持ち逃  
げ犯

マルガレータ・フォン・ヘルクスハイマー 474ゝ ヘルクス  
ハイマー伯爵令嬢

ヴィルフリート・フォン・ベヒトルスハイム元帥 422ゝ  
480年前後の宇宙艦隊司令長官 朝寝坊。

グレゴール・フォン・ミュッケンベルガー大将 グレゴール・フ  
オン・エッセンバッハ上級大将 429ゝ

後にエッセンバッハ子爵叙爵。

447年18歳の時、母のヴィルフエルミナの姪と結婚。

480年前後の宇宙艦隊副司令長官

フリーデグット・フォン・ミュッケンベルガー フリーデグット・  
フォン・エッセンバッハ 463ゝ

士官学校生徒。 グレゴールの孫。

エーリッヒ・フォン・ミュッケンベルガー エーリッヒ・フォン・エ  
ッセンバッハ 448ゝ

グレゴールの息子フリーデグットの父。

14歳で現在の妻を孕ませてグレゴールにぶん殴られた。

士官学校中退。 現在ミュッケンベルガー本家領管理をしている。

テオドール・フォン・シュタインホフ元帥 410ゝ  
統帥本部長 メタボ

ハーロルト・フォン・エーレンベルク元帥 408)  
軍務尚書 趣味早朝ランニング。 曾孫が可愛くて写真を尚書室に飾っている。

アルノルト・フォン・フライエンフェルフ中将 480年前後の帝  
国軍士官学校校長  
最近禿が進行中。 胃炎進行中。

ウォルフガング・ミッターマイヤー 459)  
できちゃった婚 疾風

エヴァンゼリン・ミッターマイヤー 464)  
479年7月1日結婚

フェリックス・ミッターマイヤー 479年12月29日  
双子 疾風男の子

エリーゼ・ミッターマイヤー 479年12月29日  
双子 疾風女の子

ロベルト・ミッターマイヤー 疾風父 造園技師

アデーレ・ミッターマイヤー 疾風母

アルフレート・ミュールマイスター少佐 440)  
捕虜から帰ってきたエヴァンゼリンの父

現在加療中。 看護婦27歳とラブラブ中。

オスカー・フォン・ロイエンタール中尉 458 言わずと知れた誑し

ール事件当事者  
ロリエンタ

マールバッハ伯レオンハルト ロイエンタールの伯父  
ロイエンタールに自分の娘を嫁がせようと虎視眈々と狙っている。  
ロイにとっては疫病神だが基本的には悪い人物ではない。

エルンスト・フォン・アイゼナツハ 457 沈黙 今のところ殆ど出番なし

フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト 458 黒猪

リヒャルト・オイゲン 460 後のビッテンフェルト副官

449 テレーゼファンクラブ会員ナンバー25

アウグスト・ザムエル・ワーレン 458 愛妻家未だ鉄腕じゃない

リーザ・ワーレン ワーレン夫人 478年7月入籍

レオポルト・ライブル大尉 458〜 シミュレーション教官

クレメンス・ブレンターノ准将 30代男性

シミュレーションでテレーゼにボコボコにされた。

憲兵隊実働部長へ移動

ハインリヒ・フォン・ヴィッツレーベン少佐 20代男性

マルティナ・フォン・バウマイスター大尉 20代女性

ヴァーリア・ディーツゲン中尉 20代女性

4人ともテレーゼの侍従武官でグリーンメルスハウゼンの部下。

リヒャルト・フォン・グリーンメルスハウゼン子爵大将 409〜

言わずと知れたスパイマスター テレーゼの悪巧み仲間。別名ア

ウリス

憲兵総監に就任

ウルリッヒ・ケスラー少佐 452〜 グリーンメルスハウゼ

ンの部下

今のところロリかは不明 テレーゼの悪巧み仲間

憲兵隊総監副官に就任

ユリアーネ・フェルゼンシュタイン イゼルローン要塞にあるバー

フアンタズイーのママ

30代前半 グリーンメルスハウゼンの部下

レテーナ バー フアンタズイーのホステルロイエンタール現

在の相手、

ユリアーネの部下 貴族の隠し子だと言うが

真相は不明。

マンセル・フォン・グリーンメルスハウゼン少将 リヒャルトの子  
任務とは言え愛人200人の噂が立つ カロリーネの養父

デリンガー軍曹

箱に入ってケスラーの身代わりをした

ランセル准尉

箱を担いだ 20代の綺麗な女性です

メイドのハンナ  
ンの工作員

アンネローゼの所にいるグリーンメルスハウゼ

幼年学校に弟が在籍しているらしい。

ユストウス・エーベネ中将

秘密工場親玉

ハンス・ノイマイヤー中佐

コンピュータープログラムが

得意

グリユザンテーメ・グリユツィーニ工造兵大佐

新造艦設計士

ウィリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ中将 429

ローエングラム駐留艦隊司令官 意外にずばら、

単身赴任時は3日ほど同じパンツを履くことがあるらしい。

奥さんと娘が居る。



エーリツヒ・フォン・ハルテンブルク伯爵 447

ハルテンベルク伯爵令嬢エリザベート 459 マチアスの婚約者

フォルゲン伯爵令息のカール・マチアス サイオキシンの麻薬の元売り

フランツ・オットー・レイトマイエル 画家 メックリンガーの代わりにヴェストパーレ男爵夫人のお気に入り

ブルーノ・フォン・シルヴァーベルヒ 内務省建設局官吏 地方左遷中

ブルーノ・フォン・コルプト子爵 466 原作ではミッターマイヤーに射殺

アウグスト・フォン・シュターデン大佐 理屈倒れ、フレーゲルの逆鱗にふれ熱砂の星へ左遷  
フレーゲル追放後、憲兵隊経理部長に就任、陛下を敬愛する様になる。

プレスブルク大尉 ヴェルナー・フォン・ケーフェンヒラー大尉

エコニアから捕虜交換で返ってきた士官 騙されやすい。現在入院中  
テレーゼと陛下の考えで、ケーフェンヒラー男爵家の養子になった。  
宮中警備隊所属

リンデマン准将 元ローエングラム星系駐留艦隊司令官 頭

が固いので罷免

ボルヒヤルト少将                      アルタイル星系警備艦隊司令官    普通の人

ヘルマン・フォン・リユーネブルク                      450                      未登場

アルノルト・フォン・オフレッサー大将                      439                      装甲擲弾兵

副總監                      原始人、石器時代の勇者

ヴァーリア・フォン・オフレッサー                      450                      けいおんのムギ似

沢庵眉毛                      力持ち、握力50kg

ズザンナ・フォン・オフレッサー                      466年7月29日                      母親

似    沢庵眉毛                      力持ち                      貧乳

エアハルト・フォン・オフレッサー                      477                      父親似

バルムンド・バウムガルテン                      424                      15歳より35年間装

甲擲弾兵を勤め上げ、退役後オフレッサー家の執事に。若き日のオフレッサーを教えた教官。                      現在ギツクリ腰気味。                      元中佐

アーリア・バウムガルテン                      440                      バルムンドの妻、元々

ヴァーリアの家から来たメイド

現在メイド長。                      468年にバルムンドと結婚。

ライムバッハー上級大将                      430                      装甲擲弾兵總監

エルネスト・フォン・モルト中将                      装甲擲弾兵總監部査閲官

憲兵隊副總監へ移動

ワルター・フォン・ラフト大佐

装甲擲弾兵

武装憲兵隊部隊長へ移動

オットー・パウマン大佐

装甲擲弾兵 第12装甲擲

弾兵師団所属

武装憲兵隊部隊長へ移動

レムラー大尉

装甲擲弾兵

クリストフ・フォン・シュタイエルマルク男爵中将

第二次テアマト会戦で活躍したハウザー・フォン・シュタイエルマルク中将 398?の孫  
祖父と同じで少壮の戦術家

クライスト大将

イゼルローン要塞指揮官

ヴァルテンベルク大将

イゼルローン要塞駐留艦隊指揮官

エルンスト・シュムーデ少将

シュタイエルマルク艦隊参謀長

ミヒヤイル・ジギスムント・フォン・カイザーリング少将 後の  
アルレスハイムの当事者

リヒャルト・パーペン准将

カイザーリング艦隊参謀長

テーグリヒスベック大将

イゼルローン要塞司令官

プラテンシュレーガー大将

イゼルローン要塞駐留艦隊司

令官

クラウス・フォン・リヒテンラーデ侯爵      帝国宰相代理      国務尚書

シュレーンブルク伯      帝国フェザーン駐留弁務官

エルネスト・メックリンガー少佐      454      男爵夫人フラグが折れて未だ有名じゃない。

レオポルド・フォン・ケッセリング中将      フリードリヒ4世の主  
席侍従武官

シェーンシュテット准将      フリードリヒ4世の次  
席武官

グライフス中将      エッシェンバッツハ艦隊参謀長      後の宇宙艦隊  
総参謀長

ミヒヤエル・フォン・ノイケルン      宮内尚書      エヴァちゃん  
事件で陛下に怒られる

宮内省の下級官吏      エヴァちゃん事件の元      マイナス30  
度の世界へ左遷

ビュルクナー少佐      イゼルローン要塞駐留艦隊の航海参謀

レギナルト・フォン・ケルトリング侯爵中将      434      クラリツサの父  
ケルトリング侯爵家当主      グレゴール・フォン・エッシェンバッツハ  
のとはここ

カール・ハインツ・ケルトリング      433の長男      宇宙艦

## 隊司令官

クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー男爵中将 408  
原作なら480年1月1日急性心筋梗塞で死亡するが、  
この病氣自体早期発見早期治療すれば、

大丈夫な為生存中、現在は入院中治療中。

ローエングラム星系駐留軍統帥部第7課課長の肩書きを持つ。  
その後宥めて、憲兵隊査閲官へ就任

ヨアヒム・キューバウアー准将 統帥本部情報部所属  
捕虜交換時スパイを送り込もうしていたが中止させられた。

クリストフ・ドウンケル中佐 446

テレーゼの御召艦ラプンツェル艦長

ハンス・エドアルド・ベルゲングリューン少佐 452

テレーゼの御召艦ラプンツェル運用長

フォルカー・アクセル・フォン・ビューロー少佐 452

テレーゼの御召艦ラプンツェル副長

ホルスト・ジンツァー少佐 452

テレーゼの御召艦ラプンツェル防衛指揮官

アデナウアー少佐 男爵家当主 元商船の船長

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン? 艦長

テレーゼの御召艦ラプンツェル補給長

ハルトマン・ベルトラム大尉

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン? 副長

イゼルローン艦隊所属新造駆逐艦カツエ？へ異動

ヨーンゾン軍医中尉 大尉

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？軍医

テレーゼの御召艦ラプンツェル所属

シャミツソー中尉

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？砲術長

イゼルローン艦隊所属新造駆逐艦カツエ？へ異動

デューリング中尉

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？水雷長

イゼルローン艦隊所属新造駆逐艦カツエ？へ異動

エメリツヒ少尉

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？航宙主任

テレーゼの御召艦ラプンツェル所属

フレーベル少尉

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？通信主任

イゼルローン艦隊所属新造駆逐艦カツエ？へ異動

グナリスト少尉

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？索敵主任

テレーゼの御召艦ラプンツェル所属

インマーマン工兵中尉 少佐

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？機関長

テレーゼの御召艦ラプンツェル機関長

アラヌス・ザイデル兵長 伍長

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？機関部員  
テレーゼの御召艦ラプンツェル機関部員

ロルフ・ザイデル 463

アラヌス・ザイデル兵長の弟現在16歳

シュミット二等兵 一等兵

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？機関部員  
新人の機関部員

テレーゼの御召艦ラプンツェル機関部員

ヴントー等兵 上等兵

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？機関部員  
テレーゼの御召艦ラプンツェル機関部員

ヘルマン・メルダース少佐

ケンプの代わりの飛行長、やる気満々。忠誠心大。  
捕虜交換で帰ってきたワルキューレパイロット、現在再訓練中  
片眼が不自由 ケンプと因縁有り。

カール・グスタフ・ケンプ少佐

453

撃墜王 ラプンツェル航空参謀をお願いしたいが断る。  
3人と非常に仲が悪くなった。

ダンネマン中佐

戦艦クロツセン艦長

美人の娘がいるがその娘がロイエンタールに弄ばれた。  
ベルゲングリューンの元上司

ハウプト中将

軍務省人事局長

シュミットバウアー造船中将      皇帝陛下直属工廠長  
技術オタク

タウベルト造船大佐      ラプンツェル造船主任  
落ち着いた紳士

エルンスト・フォン・バウマン少将      軍務省人事局人事部長  
補佐

隻眼の少将、      グリンメルスハウゼンを爺さんという。

トーマ・ネルリンガー中尉      バウマン少将の副官  
苦勞をしており胃が悪い。

クルマン曹長      バウマン少将の部下

シュミット曹長      バウマン少将の部下

コルネリアス・ルッツ大尉      456      巡航艦ゲヴィッター副長

エルラッハ中佐      巡航艦ゲヴィッター艦長

ジークベルト・ザイドリッツ      士官学校4年      460      }

ベルンハルト・フォン・シュナイダー      士官学校4年      460      }

ギュンター・キスリング      士官学校3年      461      }

アントン・フェルナー      士官学校3年      461      }



ナイトハルト・ミュラー 士官学校3年 461}

カール・エドワルド・バイエルライン 士官学校1年 463}

オーディン帝国大学教授、アドルフ・フォン・ゼーフェルト博士

ライナー・グルツク 内務省官吏

アリーセ フレーゲルのメイド 肉体関係有り  
フレーゲル家閉門後は実家に帰る。

典礼尚書のアイゼンフートの曾孫コンラート 462}  
熱砂の惑星で勉強中、結果的に島流し。

憲兵副総監クラーマーの息子グスタフ 462}

ヴィクトール・フォン・コルプト 462}  
チクリ犯としてフレーゲル達に怨まれるが、誤解

シエッツラー子爵の息子フィリップ 462}  
熱砂の惑星で勉強中、結果的に島流し。

ヴェルナー・フォン・シャイド男爵 462}  
熱砂の惑星で勉強中、結果的に島流し。

ヘルムート・フォン・ノルディン ノルディン少将の弟 462}  
チクリ犯としてフレーゲル達に怨まれるが、誤解

ヴァーゲンザイル 462}

ゾンバルト 462

アーニャ ヒルデスハイム伯爵のメイド  
ロベルト島流し後、屋敷に戻る。

シャーフェン少尉 オフレッサ邸警護指揮官

ランド軍曹 オフレッサ邸警護兵

レオポルド・シューマツハ少佐 452

憲兵隊兵

站班長

宇宙暦789年度人名辞典同盟簡易版（前書き）

同盟少ないです。

## 宇宙暦789年度人名辞典同盟簡易版

同盟軍版です

サダ中将

第4艦隊司令官

シンクレア中将

第7艦隊司令官

シドニー・シトレ中将

第8艦隊司令官

ラザール・ロボス中将

第12艦隊司令官

クラドック少将 787

第4艦隊副司令官 第四次イゼ

ルローン戦で戦死

パストーレ准将

第4艦隊分艦隊司令官

ラファエル・ラ・フォンテーヌ  
等弁務官

フェザーンにある自由惑星同盟高

良識派 引退

チャン・ヨーステン  
等弁務官

フェザーンにある自由惑星同盟高

汚職まみれ 新任

ディオニシオ・エンリケス

自由惑星同盟最高評議会議長

ヤン・ウェンリー少佐  
の英雄になるが、

原作主人公の一人 エルファシル  
宣伝効果で今はペテン師扱い。  
現在第8艦隊作戦参謀

ヨブ・トリューニヒト

新進気鋭の政治屋 扇動政治家

ジェームズ・ロックウェル少将

パーヴェル・コヴァリスキー大佐  
敬司令官

ジャムシード星系同盟軍補給

に見せかけ謀殺

ワイン事件の口封じに事故死

アレクサンドル・ビュコック准将  
司令官

マーロヴィア星系方面警備隊

バーナビー・コステア大佐  
横領後家族共々

元エコニア捕虜収容所所長 公金

フェザーンへ逃亡

ジェームズ・ジェニングス中佐

エコニア捕虜収容所所長

ポートランド大尉  
公金横領後家族共々

元エコニア捕虜収容所経理係長

フェザーンへ逃亡

フョードル・パトリチェフ大尉 エコニア捕虜収容所参事官 なる  
ほどおじさん

バリング中尉 エコニア捕虜収容所経理係  
元ビュコックの部下

マシューソン准将 エコニアのあるタナトス管区司令官

ムライ中佐 タナトス管区参事官

ヴィットリオ・エマニエール 同盟軍軍人捕虜収容所での地獄の  
日々を書き綴る

チャールズ・ブロンズ少将 同盟軍情報部所属

サミュエル・シャントルイユ中将 同盟軍情報部長、

オスマン大佐 統合作戦本部記録統計室 室長

ティボールド・フランクリン 国防委員長

ミハイル・ブルドウコフスキー大将 統合作戦本部次長

アーサー・リンチ少将 元エル・ファシル警備艦隊司令官  
帝国の捕虜と成るが宣伝効果で真のエル・ファシルの英雄の渾名  
が付く

現在収容所収監中 欠席状態であるが 大将へ昇進 同盟軍最高  
幕僚会議議員就任

くだらない小ネタ集（前書き）

ほんとうにくだらないです。

## くだらない小ネタ集

ストレス解消とかの、あくまでパロディです、声優ネタとかです。

その1    ガンダム43話    光る宇宙

イゼルローン要塞にて。

「ラインハルト閣下が脱出されるのを聞いて支援に向かおうとしましたが残念です。」

上級大将なら・・・うつうつ」

「安心しろ閣下は私が守って見せよう」

「噂の白毛はございませんな」

「此処も大部空気が薄くなってきた、フィーアは脱出しろ」

「兄さんはどうするのです?」

「ローエングラム伯はやはり許せぬと判ったそのケリはつける」

「兄さん」

「お前も大人だろう、いい女になるのだな、アーベント君が呼んでいる」

「アーベントが」

「ローエングラム閣下は?」

「出航されるところであります」

「上空レダ?接近中、急速発進」

「座れん者は床に伏せさせろ」

「10、9」



「キルヒアイス、私の手向けだ親友と仲良く暮らすが良い」  
「ケスラーか！」

[illegible]

その2 C V 田村ゆかり

謎多きオーベルシュタインの恐怖、また1人取り込まれていく。その野望は私が打ち切ります。

腹黒皇女、ブラッティてれーぜ、はじまります。

ツールハンマーで全力全壊！！

[illegible]

その3 ガンダム第1話 ガンダム大地に立つ

「同盟の新型か、殺っちまえばこっちのもんだ！」

「よせ！ロイエンタール」

「ケスラー大佐だって戦場で出世したんだ、俺だって」

「此は動きますね、この天才たる、アンドリユー・フォークに掛ければ新型機なぞ簡単ですぞ」

「動いた！」

「何って奴だ、ビームを全く受け付けません！」

「離れるロイエンタール！」

「嫌未だ旨くうごけんようです」

「へへおびえて嫌がるぜ」

「うわー」

「ロイエンター！」

「武器はないのか？」

「ロイエンタイル後退できるか？」

「補助動力が仕えます、行きます」

「逃がすか」

「うわっ———」

「認めたくないモノだな、若さ故の過ちと言うモノを」

[illegible]

その4 OVA45話 同盟軍の現状のナレーションより

士官学校校長フライエンフェルフ中将は、この数年来のストレスで頭髪の大半を喪失。

側頭部に僅かにの来る頭髮を除けば、現存する纏まつた頭髮は前頭部だけと成つていた。

前頭部は、ストレスで抜け始めた後は、かつての教え子だった、アイゼナツハから貰った毛生え薬が活躍していた。

また各地の教え子から頭髪に良い食品を、

廃棄寸前の在庫品から、

テストも終わっていない未承認薬までをかき集めて。

[illegible]

別伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後 前編（前書き）

本編と取りあえずは、関係ない番外編です。

## 別伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後 前編

帝国暦488年10月10日

負け続けで遂にガイエスブルグ要塞前面まで討伐軍に侵攻され、  
ヴェスターランドへの核攻撃で、リップシュタット貴族連合が内部  
瓦解しつつあった、  
ガイエスブルグ要塞内で叛乱が発生した。

叛乱の首謀者はヘルマン・フォン・リユーネブルク大将で討伐軍司令官シェーンヴァルト元帥に対する個人的な恨みで貴族連合側に参加していたはずであるが、  
土壇場で裏切り要塞の主要各所を占領し、貴族の子女を人質にしたのである。

又ブラウンシュヴァイク公も隙を突かれて捕縛された。  
その為、貴族連合艦隊司令官ゼークト大將は無謀な突撃を諦め始めていた。

その頃、ヴェスターランド核攻撃を聞いたキルヒアイスは、ブリュンヒルトに向かい、  
ラインハルトと口論を行っていたが、ラインハルトは親友に対して暴言を吐き分かれてしまった。  
此が終生の別れと成ることも知らずに。

いよいよ貴族連合にとどめを刺そうとしたとき。  
【直ちに両軍戦闘を止めよと】通信が入った。  
両軍を攻撃可能な中央点に進出してきたのは、

シュワルツ・ランツエンレイターを露払いにした、銀河帝国皇女艦隊総旗艦クリエムヒルトであった。

旗艦は両軍の戦火を収める様に止まった。

そして、宇宙空間に3D映像でテレーゼの姿が映し出された。

さらに、銀河帝国全土に流されたのである。

テレーゼが今回の内乱において、既にブラウンシュヴァイク公や主要貴族が捕縛されたことを伝えると。

貴族連合軍は士気が一気に低下していった。

また参加した者は罰するが、家族には累を及ぼさぬと言う事も彼等に矛を収めさせる結果と成った。

このまま戦っても滅亡有るのみと判っていたからである。

しかし面白くないのは、ラインハルトである。

散々苦勞して、円形脱毛になって此処まで来たのに、皇女風情に手柄を横取りされるのである。

苛つくラインハルトの後ろでは、オーベルシュタインがなにやら考え始めていた。

そうこうしているうちに、ヴェスターランド核攻撃についての話が始まった。

撃ったブラウンシュヴァイク公の罪もだが、

それを黙認し自分の権力掌握に使ったラインハルトの罪も声だけに責めたのである。

キルヒアイスもその証拠を見せられ、愕然としていた。

ラインハルト様はお変わりに成られたと。

さらに幼年学校以来の不敬な言動や篡奪の意志をしめした映像が流

されのである。

その映像で銀河帝国全土で動揺が起こっていた。  
元々平民の間では焦土作戦などをして、評判の悪いラインハルトである。

さらに評判は地に落ちていった。

そして、ラインハルトの旗下艦隊でも動揺が起こっていた。

オーベルシュタインがラインハルトに囁く。

「閣下。このままで居ますと閣下まで肅正されます」

「その様な事」

「いいえ。あの女は本気です、あの目を見れば判ります」

「しかし」

「閣下このまま行けば、グリューネワルト伯爵夫人も害されます」

「馬鹿な姉上は関係無いではないか！」

「閣下が篡奪者として肅正されれば、間違えなく連座でグリューネワルト伯爵夫人も肅正されます」

「姉上」

「閣下、グリューネワルト伯爵夫人をお助けするには、あの女を殺すしか有りません」

「しかし、その様な卑怯なこと」

「閣下、あの女は卑怯にもグリューネワルト伯爵夫人を人質にするに違いありません、

手をこまねいていては、手遅れになります」

「姉上、姉上、姉上」

総旗艦クリエムヒルトが前進してくる。

テレーゼの演説は続く。

「シェーンヴァルト元帥の職を解き、収監する」

いよいよ最後である。

キルヒアイスもラインハルトより、アンネローゼの事を心配で胸が張り裂けそうであった。

「閣下！」

オーベルシュタインが決断を求める。

幽鬼のように立つラインハルト。

決定的な一言をオーベルシュタインが話す。

「御決断頂けないなら、

このまま行くと、グリューネワルト伯爵夫人は恐らく処刑されるでしょう」

自裁ではなく処刑の文字にラインハルトが反応する。

「全艦隊総旗艦クリエムヒルトを攻撃せよ！」

その言葉にほくそ笑むオーベルシュタイン。

各艦で混乱が生じるが、ラインハルト艦隊の内1万隻ほどが砲撃を行う。

いきなり砲撃に銀河帝国全土に驚愕が走る。

次の瞬間、総旗艦クリエムヒルトは爆炎の中にその姿を消し消滅した。

其処の集まった各艦隊、兵達が呆然と始める。

中には泣き出す兵士も多数出ている。

又捕まっている貴族達から、殿下！という嗚咽が聞こえ始めた。



ゼークト大将も怒りを露わにしだした。

「あの金髪の小僧を八つ裂きにしてくれる！」

しかし一番激高するはずのケスラー、ミッターマイヤー、ビッテンフェルトが涼しい顔をしている。

そして、大笑いを始めた。

「ハハハハハ」

気でも狂ったかと思う者が出たが、次の瞬間、テレーゼが再度現れたことで、疑問が解けていった。

テレーゼ自身ラインハルトよりオーバーシュタインを全く信じていなかった為に、

クリエムヒルトを無人で進行させていたのである。

テレーゼは総旗艦ヴェルザンデイに乗っていたのだ。

ラインハルトの叛意を確かめる為に敢えてそうしたのである。

ラインハルト艦隊は5個艦隊75000隻であるが、

益々混乱するラインハルト艦隊。

そのうち何割が叛乱に参加するか全く不明になってしまった。

降伏勧告が出されると、次々に機関を停止して白旗を揚げていく各艦。

アンネローゼの事で、ラインハルトが呆然としてまい、このままではとオーバーシュタインが後退を命令する。

後退したラインハルト艦隊に対して、

シュワルツ・ランツェンレイターが突撃を開始する。

「進め進め！テレーゼ様を害するような輩は1人残らず俺が地獄へ送ってやる！！」

シュワルツ・ランツェンレイターが凄まじい勢いでラインハルト艦隊を引き裂いていく。

続いてミッターマイヤー艦隊が左翼から圧力を掛け。

ワレーンやルッツやロイエンター艦隊が右翼から攻撃を仕掛ける。なんと今まで戦っていた貴族連合軍まで参加許可を受けて、ラインハルト艦隊を攻撃する。

「戦艦ガルガ・ファルムル撃沈、レンネンカンブ提督戦死！」

ブリュンヒルトの艦橋は味方の損害がウナギ登りであると次々に報告が入ってくる。

ラインハルトが呆然と偉している中、

オーバーシュタインが、この役立たずがと思っていた。

このまま逃げるしかないと思ったその瞬間。

「後方より砲撃。グリルパルツァー分艦隊からです！」

味方の裏切りがでたのである。

次の瞬間、ブリュンヒルトの艦橋至近にレールガンが着弾。

ラインハルトを天井から落ちてきた鋭いセラミック片が貫いたのである。

オーバーシュタインも倒れてきた柱に下半身を押しつぶされ半死半生である。

ラインハルトが出血しながらつぶやく。

「夢は夢で終わるのか、俺の力はこの程度のモノだったのか、姉上、キルヒアイス」

オーバーシュタインが彼にしては異様な笑いをあげる。

「ハハハ、ラインハルト・フォン・シェーンヴァルト、卿は面白い

ように動いてくれた。

しかし私の見込み違いだったようだな」

そう言ってオーベルシュタインは事切れた。

ラインハルトが最後の力で叫ぶ。

「俺は道化だつのか！、姉上ー」

その瞬間ブリュンヒルトをケーニヒス・ティーゲルの主砲が貫きラインハルトごと原子の粒に成っていった。

別伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後 中編（前書き）

こっちの方が書きやすく、  
塾長は考え中です。

## 別伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後 中編

帝国暦488年10月10日

ブリュンヒルトが宇宙の藻屑と消えたとき、バルバロッサ内では走馬燈のようにアンネローゼとラインハルトの思い出がキルヒアイスの頭の中を駆け回っていた。

呆然と成ったキルヒアイスに代わり、参謀長ブラウチツヒがエンジン停止を命令し全艦隊に降伏を命令した。次々に降伏していく旧ラインハルト軍。

一刻も早く降伏しないと怒りまくっているシュワルツ・ランツェンライターに蹴り殺されるからである。特にクリエムヒルトを砲撃した艦は付け狙われ殆どの艦が撃沈された。降伏後各艦は監視下に置かれ順次オーディンへ回航することになった。

貴族連合と家族達とラインハルト軍の幹部達はガイエスブルグ要塞から、

オーディンへ向かうように輸送艦に乗せられていく。

しかし、ジークフリード・フォン・キルヒアイスだけは総旗艦ヴェルザンディに搭乗させられ帰国する。

当初は自決も考えたキルヒアイスであるが、アンネローゼ様の事を残しておけないと思いとどまり護送されていく。

航海中、ビッテンフェルトは大声でキルヒアイスとラインハルトを非難した。

ミッターマイヤーはラインハルトは幼年学校時からの因縁があったと独白した。

ロイエンタールは、夢破れたなと言だけ話していった。

テレーゼ自身がやってきたのは、オーデインへあと5日の距離を残した時であった。

「キルヒアイス、卿が居ながらシェーンヴァルトの野心を抑えきれなかったとは残念だ」

「貴方に何が判るのですが、恵まれた生まれの貴方に」

「恵まれたか、フン。妾は3度も殺されかけて居るのじゃ、それでも恵まれたと言えるか」

「3度も・・・」

「そうよ3度じゃ。グリューネワルト伯爵夫人は一度もないではないか」

「アンネローゼ様は囚われていた、それでも恵まれていたと言えるのですか」

「キルヒアイスよ考えてみよ。」

後宮に上がらず、あのままおれば遠く無い未来にアンネローゼはさらに過酷な運命を迎えたであろう」

「そんなこと私が」

「どうにか出来る年齢であつたか？」

あるまえ、何れアンネローゼは弟と父親を喰わせる為に春を売ったであろう」

「アンネローゼ様がその様な事をするわけがない！」

「落ちぶれた帝国騎士の娘の末路は大概そうじゃ、」

アンネローゼだけが特別ではあるまえ」

「アンネローゼ様……」

売春宿にいるアンネローゼを想像したのであるうか、  
キルヒアイスが涙顔になっていく。

テレーゼは別にキルヒアイスを虐めに来たわけではない。

「キルヒアイスよ、アンネローゼの罪は弟が篡奪未遂と大逆未遂と  
不敬罪と言う事じゃ」

「アンネローゼ様は関係有りません！」

「そうはいかんのじゃ、連座があるのでな。卿の両親も連座じゃ」

「そんなアンネローゼ様、父さん、母さん……」

「ただし言うておくぞ、卿が死んでも罪は変わらぬ。いや逆に残つ  
た者が責任を更に追及されよう。」

つまりグリューネワルト伯爵夫人が篡奪と大逆を唆したとな」

「アンネローゼ様はそんな事はしない！」

「真実などとは関係ないのじゃ、

卿が生きて法廷に立たなければグリューネワルト伯爵夫人が立つだ  
けなのじゃ」

うなだれるキルヒアイス。

こうなれば生きて自分が罪を全て被り死罪と成つてもアンネローゼ  
を守ろうと心に決めたのである。

「私が法廷で罪を認めればアンネローゼ様を助けて頂けるのですか  
？」

「良かるう、キルヒアイスが罪を認めればアンネローゼは助けて遣  
わそう」

「約束です」

「判った」

キルヒアイスは自らの命をアンネローゼに捧げるのである。

同じ頃ノイエ・サンスーシ、グリューネワルト伯爵邸ではアンネローゼに対して自害等をしないように監視がつき軟禁されていた。又キルヒアイスの両親も自宅に軟禁されていた。

帝国暦488年11月20日

総旗艦ヴェルザンディ以下艦隊がオーディンへ帰還した。

そのままキルヒアイスは誰とも面会も許されずに、憲兵隊で取り調べを受けラインハルトとの共同謀議を認めた上で自分が主犯であるとアンネローゼを守る為に独白したのである。

弁護人無し反論無しの裁判で出た判決は、篡奪犯、大逆犯、不敬罪で死刑が宣告された。

キルヒアイスは淡々と判決を受け入れ、心の中でアンネローゼ様は救われると安堵した。

そして父さんと母さんに迷惑をかけてしまった事を詫びていた。

帝国暦488年12月24日

キルヒアイスの銃殺は嫌みたらしく、グリューネワルト伯爵邸の至近で行われる事になった。アンネローゼは今も幽閉中である。

テレーゼも銃殺を見届けに来ていた。

キルヒアイスの両親も引つ立てられて来た。

キルヒアイスは涙ながらに両親に詫びた。



「父さん母さんゴメン」

それしか言えなかった。

両親も判ったと言っしか無い。

まず両親が壁に立たされ、銃殺隊により銃殺された。

「父さんー母さんー!!」

銃殺され崩れ落ちる両親。

それを見て泣くキルヒアイス。

テレーゼはつまらなそうに扇を弄っている。

それを見てキルヒアイスは怒りを覚える。

その時である、後方のグリューネワルト伯爵邸から黒煙が上がり始めた。

騒ぎ出す、宮中警備隊。

キルヒアイスもアンネローゼの事を考え蒼くなる。

1人テレーゼだけが冷静にその黒煙を見ていた。

暫くしてグリューネワルト伯爵邸から伯爵夫人を軟禁していた兵達が駆け寄ってきた。

テレーゼが誰何する。

「如何したのじゃ？」

「はっ、グリューネワルト伯爵夫人が全ての罪を認めて、ご自害成されました、その際火災も発生し炎上中でございます」

自害。アンネローゼ様が自害・・・嘘だ・・・嘘だ・・・嘘だ!!!

キルヒアイスは胸が裂けるほど苦しみます。

其処へテレーゼがとどめを刺す。

「存外アンネローゼも弱い女よ。自害とはな、ほんに期待はずれじゃ」

「何だと！」

キルヒアイスが怒りを上げる。

「どうせ謀反人として流刑じゃ。それに、そちの居ない世界はたえられんそうじゃな」

掴みかかるうとするが、駄目である。

それよりせめてアンネローゼ様を炎からお出ししようと体が動いた。

銃殺する為に拘束が解かれていた為、燃える館へ走り出した。

逃げるぞーの音が走る。

銃殺隊が銃を構えて止まれと言うがそんな事は構わない。

あと少しでアンネローゼ様の元へいける。あと少し。あと少し。

しかし、無情にもあと少しでキルヒアイスの体をブラスターが貫いた。

キルヒアイスは薄れていく意識の中で10歳の時のあの幸せだった日々を思い出しながら倒れていったのである。

別伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後 後編（前書き）

塾長より先にパラレルワールドの話の最終回をUPします。

## 別伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後 後編

「アンネローゼ様！！！」

そう言いながら、キルヒアイスの意識は暗転していった。

光が見える、まぶしい光が。あれがヴァルハラなのだろうか？  
はっと目を開けると、照明がまぶしく感じる。

おかしい、自分はアンネローゼ様の館の前で撃たれたはずだ。

助かって病院へ連れて来られたのか？

いやそのまま銃殺だったはずだし体の痛みもない。  
だいちあれだけ派手に倒れたのに服は全く汚れていない、

アンネローゼ様はどうなったのだ。

そして此処は何処なんだ？

ベッドに寝ていたが起きて付近を見た！

アンネローゼ様！！

少し離れたベッドにアンネローゼ様が寝ている。

アンネローゼ様、アンネローゼ様、アンネローゼ様が直ぐ其処にいる！

キルヒアイスはアンネローゼの元へ走り行く。

アンネローゼはベッドに寝かされている。

「アンネローゼ様、アンネローゼ様」

胸元を見るとゆっくりとだが息をしているのがわかる。

アンネローゼ様が生きておられる！

「アンネローゼ様、アンネローゼ様」

失礼かと思ったが体を揺する。

「ん・・・」

アンネローゼ様が目を覚ましてくれた。

「アンネローゼ様」

「ん・・・ジーク・・・」

「アンネローゼ様！！！」

アンネローゼが気がつきキルヒアイスを見つめる。

「ジーク」

「アンネローゼ様」

「ジーク此処は何処なのですか？」

「アンネローゼ様、すみません私も判らないのです」

「私はジークの死刑と弟の死を聞いてもう生きていても仕方がないと、

毒酒を呷ったのです、それなのに何故生きているのかが判りません」

「アンネローゼ様、私もです。アンネローゼ様の館が燃え始めたとき、

アンネローゼ様の元へ走る途中で銃弾に貫かれたのですがその痕もありません」

2人して不思議がる。

そして見つめ合う。

その時である、部屋の扉が開き眩い光が差し込んできた。扉があること自体を2人とも気がついていなかった。

アンネローゼを庇うキルヒアイス。

「アンネローゼ様」

「ジーク」

輝く光の中から、眩い輝きの鎧を纏った騎士が現れた。

騎士に対して警戒するキルヒアイス。

騎士が語る。

「アンネローゼ・フォン・グリューネワルト、

ジークフリート・フォン・キルヒアイス、

我は、アルヴィト、お前達をヴァルハラへ迎えに来た」

よく見ると女騎士であるが、ビキニアーマーを纏っている。

「ヴァルハラだと！そんな馬鹿な！」

「アルヴィト、全知を有するヴァルキリーなの？」

「小さき者よ、オーディンの元へ向かうのだ、我が案内いたす」

「私たちは死んだのですか？」

アンネローゼの方が年増なだけ冷静である。

「アンネローゼ様、その様な事を」

キルヒアイスは死に対して敏感になっている。

「その通りだ。此処は生と死の狭間、お主たちは死を迎えヴァルハラへ向かうのだ」

「そんな事あるわけがない！」

キルヒアイスは現実から目を反らそうとしていた。

「アルヴィトさん、ジークとヴァルハラでも一緒に居られるのですか？」

アンネローゼは既に現世よりヴァルハラでの事を考えていた。

「アンネローゼよ、キルヒアイスと共に暮らすことは可能だ」

「アンネローゼ様、共に暮らすとは」

「ジーク、そのままの意味ですよ、現世では共に暮らせませんでしたが、

ヴァルハラでは2人で暮らしましょう永遠に」

「アンネローゼ様、アンネローゼ様、アンネローゼ様」

泣き出すキルヒアイスを抱きしめるアンネローゼ。

「そろそろ良いか、時間だ」

「はい、さあジーク参りましょう」

こうゆう時女は強い。

「はい。アンネローゼ様」

アンネローゼに付いていくキルヒアイスはまるで犬である。

真っ白な廊下を歩くと突き当たりに重厚な扉があり、その扉が音もなく開く。

アルヴィトが此処へ入れるようにと示す。

「この扉から中へ入るように」

怖々とアンネローゼとキルヒアイスは手をギュッと握り合って部屋に入る。

部屋はまるで法廷のようであり、目の前の裁判長席に1人の女性が座っている。

その姿は、全身を真っ黒なフードとマントを纏った死神のように見えた。

「お主等が罪人、<sup>トガビト</sup>アンネローゼ・フォン・グリュネワルトと  
ジークフリート・フォン・キルヒアイスじゃな」  
罪人の声にキルヒアイスが顔色を変える。

「アンネローゼ様は罪人じゃない」

「フ、激昂するでない、此処は生と死の狭間、妾はヘルじゃ」

「ヘルの言葉に、固まる2人」

オーデインにより、ヘルは、名誉ある戦死者を除く、  
たとえば疾病や老衰で死んだ者達や悪人の魂を送り込み、  
彼女に死者を支配する役目を与えたのだ。

つまり自分たちは悪人なのかと、そして騙されたと感じた。

キルヒアイスは確かに自分は、ラインハルト様のヴェスタラランド  
の虐殺を止められなかった。

それだけでも悪人だ、しかしアンネローゼ様はそうじゃないと叫び  
たかった。

アンネローゼは自分の罪深さをヒシヒシと感じており、  
ラインハルトの悪行を助長したのが自分であると考えており、  
自分たち姉弟に巻き込んでしまった、

ジークとジークの両親に対してにいくら謝っても過ぎないと考えて  
いた。

シーンとする法廷。遂に審判がくだる。

「ジークフリート・フォン・キルヒアイス。地獄<sup>ヘレ</sup>」

キルヒアイスは審判を聞き、自分の事よりアンネローゼ様がヴァル  
ハラへ向かえるようにと祈っていた。



アンネローゼはジークが地獄に堕ちるなら自分も一緒について行く  
うと心に決めたのだ。

「アンネローゼ・フォン・グリューネワルト。地獄<sup>へ</sup>」

「そんな馬鹿な！アンネローゼ様が地獄へ堕ちるはず無い！！」

「ジーク、良いのです、私だけがヴァルハラへ行くわけには行かない  
のです。」

貴方が居ない世界などどうでも良いことなのです。一緒に地獄へ堕  
ちましょう」

「アンネローゼ様」

「ジーク」

抱き合う2人。

「フッフ、アーハハハ」

笑い出すヘル。

笑い声が気になる2人。

「良い姿を見せて貰った。2人の愛情、しかと確かめさせて貰った  
ぞ」

次第に何処かで聞いた声だと考え始めた。

真面目顔のアルヴィトが苦笑を始める。

「殿下、そろそろ宜しいのではありませんか？

この鎧、凄く恥ずかしいです」

「ズザンナ、その姿凄く似合ってるんだけどね、

その姿流石凛々しいね、父親譲りだね。<sup>オフレッサ</sup>

その姿ネットに流せばファンが山盛りになるよ」

ヘルとアルヴィトの掛け合いを聞きながら、

キルヒアイスとアンネローゼは呆然としている。

「アンネローゼ、キルヒアイス、妾じゃ、テレージェじゃ」

フードとマントを脱いだ姿は間違えなく、

銀河帝国摂政宮テレージェ皇女であつた。

絶句するアンネローゼとキルヒアイス。

「すまぬの、お主等の心意気を見たかつたのでな、一芝居うつたのじゃ」

「心意気？」

やはりアンネローゼが先に意識を現世へ呼び戻した。

「そうよ、本来であればシェーンヴェルトの罪科で4人共々死罪が相当じゃ、

だがの、お主等4人は実質的には被害者でもある。

シェーンヴェルトとオーベルシュタインの陰謀の被害者とも言えるのだ」

キルヒアイスは4人と言う言葉にすっかり両親のことを忘れていた事を思い出した。

「父さんと母さんは？」

「無事じゃ、生きておる」

両親がアンネローゼ様と共に生きている事に喜び、騙された怒りもどこかへ行ってしまった。

「ジーク良かった」

「アンネローゼ様」

両親が無事と聞き安堵する2人。

「それにじゃ、アンネローゼを連れ去つたのは、コルヴィッツじゃ

が、

その一端を作ったのは、父上でもある。

父上も死の寸前までアンネローゼに苦しみを与えてしまったと悔やんでおられた」

「陛下がその様なお言葉を」

アンネローゼが瞠目しながら涙ぐむ。

「そこで父上は何があってもアンネローゼを助けよと仰ったのじゃ、思えば今日有ることを予測していたのかもしれない」

テレーゼがしみじみと話す。

実際はそう仕込んでいたからなのだが。

それを聞き、アンネローゼだけでなくキルヒアイスも驚愕し、自分は何をしてきたのだらうと考え始めていた。

アンネローゼとキルヒアイスが質問をする。

「私は毒酒を飲んだはずですが」

「私と両親もブラスターで撃たれたはずですが」

「アンネローゼのは睡眠薬じゃ、

キルヒアイスと両親は気絶モードじゃ、

流石に誤魔化すのは大変じゃったぞ」

テレーゼは2人を見ながらニヤリとした。

「しかしな、シェーンヴェルトだけは許せん！」

テレーゼが珍しく怒気を露わにする。

「ラインハルト様はラインハルト様なりに平民の事を考えていました」

キルヒアイスが反論する。

アンネローゼは気が気でない、此処でテレゼの機嫌を損ねたら又死罪と言う事もあると、

ジークが死ぬなんて嫌だと言う感情が益々大きくなっていった。

「ジーク止めなさい、殿下に謝るのです」

「よい、アンネローゼ、妾も教えてやりたいのだ。

シェーンヴェルトとオーベルシュタインの起こした悪行をな」

何があるのか、2人はラインハルトを思い出しながら話を聞くのである。

「シェーンヴェルトは焦土作戦を行ったが、妾は反対じゃったが、それは敵を倒す為と押し切られた、その為辺境では阿鼻叫喚が発生したが、

叛徒共をアムリッツアで撃破するさい、辺境に何の処置もせず追撃しかなかった。

輸送艦隊を送り物資の補給すらなかった。

戦果のみを求めて、辺境の臣民の事などどうでも良かったと言う事だ、

結局妾が、メルカッツを送り支援を行ったのじゃ」

キルヒアイスは思い当たり反論が出ない。

「次に、ブラウンシュヴァイク公の部下がシェーンヴェルトを襲った事じゃ。

あれで内乱が起こったが、本来で有ればあれは起こらない内乱だったのじゃ」

「内乱が起こらないとは？」

「実は、あの翌日に父上の遺言状を妾が黒真珠の間で発表することになっておったのじゃ」

「その様な事が」

「なんじゃそちは知らなかったのか」

「はい、何も聞いておりません」

考え始めるテレーゼ。

「やはりな。アンネローゼよ、キルヒアイスは、騙されていたようだな」

「いったい誰に？」

ラインハルト様か？

「恐らくオーベルシュタインじゃな」

「オーベルシュタイン」

「そうじゃ、妾はあの襲撃の翌日の遺言状発表に際して、帝国全土の貴族とその家族をノイエ・サンスーシへ呼び寄せているはずであった。

そしてノイエ・サンスーシの周りには、

オフレッツサー率いる装甲擲弾兵10万人が待機しているはずであった。

そして当日、遺言状発表に事欠いて集まりし4000人を超える貴族を一網打尽で捕まえるはずであった。その際家族諸共捕縛する予定じゃった」

「その様な暴挙を行えば、殿下の名声にお傷が」  
アンネローゼが心配そうに聞いてくる。

「良いのじゃ、妾1人が悪行、未来永劫残ろうとも、僅かの犠牲で数千万の内乱における犠牲者が救えるのじゃ。妾の名誉など塵芥よ」

アンネローゼがそれを聞いて涙ぐむ。

キルヒアイスも絶句する、この方は何という方なのだろうと。

「だがな、それは前夜のシェーンヴェルト元帥府襲撃で潰え、そのまま内乱に突入してしまった。

此ほどシェーンヴェルトとオーベルシュタインを怨んだことはないぞ」

「お待ち下さい、ラインハルト様は襲撃されたのですから、悪いのはブラウンシュヴァイク公の周辺の者でしょう」

「キルヒアイス、やはりそちは知らなんだな。

あの襲撃は、オーベルシュタインが行わせたのじゃぞ」

「まさか」

「そのまさかよ、ブラウンシュヴァイクの家臣ハウプトマンがシュトライトとフェルナーを睨けて襲撃をさせたのじゃ、しかしな奴はオーベルシュタインの犬ぞ」

衝撃の事実キルヒアイスは愕然とする。

確かに、テレーゼの策を行えば、悪名は残るが門閥貴族を潰し改革が成功しただろう。

内乱に比べて遙かに少ない流血で。

それをオーベルシュタインが潰した。

ラインハルト様は何処までご承知なのだろうか、それが気になった。

アンネローゼは、弟が恐ろしいことをしていたと益々嘆くのである。弟の権力欲で数千万の人々が不幸に成ったのである。

此ほどアンネローゼの心を掻きむしる事は無いだろう、

そして弟に対する愛情が薄れ、険悪感が沸き上がるのを感じ始めていた。

「そしてヴェスターランド核攻撃の事じゃ、

撃ったブラウンシュヴァイク公も悪いが、

敢えて傍觀し権力掌握に使ったシェーンヴェルトも悪いのじゃ」

「しかし殿下もそれを阻止できなかったのではありませんか？」

些か屁理屈を言ってしまう、キルヒアイス。

まだラインハルトを信じたい気持ちがあるのだ。

「そうよの、妾もガイエスブルグに間諜を仕込んでおって、

ブラウンシュヴァイクの核攻撃の情報は得ていた」

「では知っていながら敢えて無視を為さったのですか？」

キルヒアイスが厳しく問う。

「勘違いするな、その様な事するわけが無かるう。

妾は情報を受けて直ぐに、ミュラーを遣わしたのじゃ。

そしてミュラーはヴェスターランドへ到着し待機したのじゃ」

「しかしそれで何故核攻撃が起こったのです？」

「それよ、ミュラーは見事にブラウンシュヴァイクの攻撃を防いだのじゃ」

「攻撃を防いでいるのに、何故核攻撃があるのですか？」

キルヒアイスは気がつかないらしい。

「妾はブラウンシュヴァイクの攻撃は防いだと申したのじゃ」

「それは」

混乱するキルヒアイス、ブラウンシュヴァイクの攻撃は防いだと言う事は、

他に攻撃した者が居るということなのか？

「そうよ、判ったかもう一人の攻撃者はシェーンヴェルトの配下じや！」

まさかという顔をするキルヒアイス。

アンネローゼは最早そうなのかと、あきらめ顔である。

「まさかラインハルト様がそんな事をするわけがない！」

「いやしたのじゃ。奴らは偵察艦だけでなく、巡航艦を後方から準備し、

ミュラーがブラウンシュヴァイクの攻撃を止めたときに、

隙を突いて核攻撃を行ったのじゃ。あの映像は自作自演じゃー！」

「そんな、そんな」

「証拠もある核攻撃を行ったのは、巡航艦アヴァロンじゃ」

「ミュラーがヴェスターランドを守る為に広域衛星で監視させていて偶然撮れた映像じゃ」

其処には偵察艦の影から核ミサイル発射する、

アヴァロンの姿が映っており、

その核がヴェスターランドへ次々に着弾するさまが撮されていた。

映像を見せられた。キルヒアイスが力なくつぶやいた。

「ラインハルト様の艦隊の艦です」



どうしてラインハルト様は悪魔の所業をするようになったのか、俺は何を見てきたんだと、キルヒアイスは嗚咽を始めた。

それを優しく抱きしめるアンネローゼ。

「ジーク、私は、もうあの者を弟とは思いません！」

「アンネローゼ様……」

「ジーク、貴方もあんな男を様付けなど止めなさい！」

「私の大事な人はジークだけになってしまいました」

涙ぐむアンネローゼはジークをじっと抱きしめる。

「2人とも、シェーンヴェルトが変わったのは、恐らくオーベルシュタインのせいぞ」

「オーベルシュタイン」

「そうじゃ、きやつが元帥府に入府して以来、シェーンヴェルトの行動が臣民を思うモノから霸道へと変わっていった。」

シェーンヴェルトはオーベルシュタインの負の力に飲み込まれたのじゃろう」

「ラインハルトさ。あつ、ラインハルトが飲み込まれた」

「そうじゃ、オーベルシュタイン、

きやつは、ゴールデンバウム王朝五世紀の怨嗟や怨念が固まりし化け物よ。

その化け物にシェーンヴェルトは飲み込まれたのじゃ、

シェーンヴェルト自身の野望の為に」

キルヒアイスは確かにオーベルシュタインが来てからのラインハル

トの変わり様を思い出していた。  
アンネローゼも考えていたのであろう。

暫くして。

「所でお主等の処遇じゃが、  
謀反人ラインハルト・フォン・シェーンヴェルトの一族と共謀謀議者じゃから、  
アンネローゼ・フォン・グリューネワルト伯爵夫人は毒酒を呷って  
自害。

ジークフリート・フォン・キルヒアイス家族は銃殺刑。  
となっておる、つまり既にお主等は表向き死人なのだ」

うなだれる2人。

「しかし、父上のこともある。そしてキルヒアイスは心優しき人じや、

お主等に新たな姓と名前を授けよう、無論父と母にもじや。

その代わり、余り顔をだせんから、ローエングラム領に住んでもらうぞよいな」

「しかし私たちは生きる資格が」

「アンネローゼ、安易に死を選ぶな。生き抜くことこそ贖罪と思うのじゃ。

キルヒアイスと子を成し家族を増やしその地に繁栄を起こすのも贖罪ぞ」

「キスヒアイス、卿も同じじや、アンネローゼと共に子を成し、  
育て慈しみ繁栄をもたらすのじゃ」

「殿下」

「殿下」

アンネローゼとキルヒアイスは涙ぐみながら、崩れ落ちてテレーゼにお辞儀しまくる。  
まるで土下座であった。

「此でよいのじゃ、グリューネワルト伯爵夫人は自害の上、館に火を放ち遺体は焼けてしまった。

キルヒアイス元中將は銃殺中に逃げ出し、  
グリューネワルト伯爵邸に入り焼け死んで死体も焼けてしまった。  
これが公式記録じゃ、のうズザンナ」

「御意」

「さらばじゃ、2度と逢うことは無かるう。名も無き者達よ」  
颯爽と退室していくテレーゼを見て、新たな名前を貰った2人はずつとお辞儀をし続けたのであった。

帝国暦503年9月20日

ローエングラム星系ローエングラム本星トレラント島

雄大な大地一面が黄金色に輝いている。  
今年も稲は豊作だ。

其処で仕事をしている、ノッポの赤毛の男が麦わら帽子を被り直し  
ながら汗を拭く。

「父さんー、母さんがお昼だって」

「ああ、ジークフリート、今行くよー」

手を止め、父親似で赤毛の13歳の子供を肩車しながら、彼は家族の待つ家へ帰っていく。

家では金髪の優しい笑みの女性が、

母親似で金髪の11歳の娘と共に昼ご飯の支度をしている。

「アンネローゼ、お爺ちゃんとお婆ちゃんを呼んできてくれる」

「はい母さん」

家族の団らんである。

祖父と祖母、息子夫婦に、長男、長女、そして次男、金髪の3歳児は祖母がスプーンから食事をあげている。

「ラインハルト、好き嫌いしちゃだめよ」

ジークフリートが父に話しかけてくる。

「父さん、女帝陛下は凄いな、叛徒の首都を陥落させて降伏させたんだって。」

残念だな僕も軍人になりたかったのに、これじゃ軍人に成ることが出来ないや」

「そうだな、テレーゼ様は凄なお方だったな」

「父さん女帝陛下を知ってるの」

「昔、間接的にお仕えしていたことがあったのさ」

「へー凄いな、そのお話してよ」

「ああ。教えよう、嘗て銀河を又に駆け抜けた英雄達の物語を……」

銀河英雄伝説

F i n

没伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後（前書き）

どうしようもない。ねたです。・夜勤先で書いてます。  
休み時間が終了。

本当の後編は明日以降に。

## 没伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後

「アンネローゼ様！！！」

そう言いながら、キルヒアイスの意識は暗転していった。

光が見える、まぶしい光が。あれがヴァルハラなのだろうか？  
はっと気がつく、と草原に倒れている自分に気がついた。

おかしい、自分はアンネローゼ様の館の前で撃たれたはずだ。

そう思い体を見るが、打たれた跡が何処にも見あたらない。

アンネローゼ様はどうなったのだ。

そして自分は何故此所にいるのだ。

キョロキョロしていると、

自分の方へ歩いてくる人物が見えた。

よく見ると甲冑に身を包んだ女性のようなのだ。

その豊かな胸をビキニアーマーで覆っているのが見て取れた。  
自分に近づいてくるその女に対して警戒感を持つが、  
ブラスターも何もない状態では格闘でしか戦えないのだ。

相手の出方を見るしかない、とキルヒアイスは思っているのである。

女がキルヒアイスの前に立ち問う。

「そちが、ジークフリード・フォン・キルヒアイスか？」

キルヒアイスも相手に殺気が無い事を感じて、取りあえずは答える。

「そうだがなにか？」

「我はヴァルキリーゲンドウルだ、そちをオーディンの元へ案内してきた」

「オーディンだって、そんな馬鹿な！」

「本当じゃ、そちの死はイレギュラーなのじゃ、  
ラーズグリーズ が誤ってそちの生の糸を切ってしまったのでな、  
オーディンがそちを転生させてやろうという訳じゃ」

「転生だって、そんな夢のような事を！」

「事実は事実じゃ、アンネローゼも転生できるそうじゃ」

「アンネローゼ様が、それは本当か！」

「これ声大きい、これじゃから最近の若い者はいかんだ、  
アンネローゼも誤って死んだのでな、  
オーディンが「やばっ」という事で転生させる事にしたのじゃ」

些かしい加減な回答にあきれるキルヒアイスだが、  
アンネローゼ様が転生でも生き返られる事に喜びいっぱいである。  
ラインハルトの事はすっかり忘れていた。

「そこで、特例措置としてそちら2人を同じ場所に転生させる事になった」

「アンネローゼ様と同じ場所ですか」  
更に喜ぶキルヒアイス。

「場所は漫画の世界でリリカルなのは世界です、其所で夫婦として転生するのです」

夫婦の言葉に嬉しがる。

「では、オーディンの元へ行くぞ」



別伝 ヒルダの殺人クッキング（前書き）

今回のヒルダクッキングⅡシャルクッキングで思いついた、千文字ほどの短編。

## 別伝 ヒルダの殺人クッキング

新帝国暦1年7月6日

オーデイン キュンメル男爵邸

この日皇帝に即位したラインハルトは、即位後初の臨御先、キュンメル男爵邸へ向かった。

キュンメル男爵がラインハルト一行をもてなす為に中庭へ誘つ。料理はヒルダが腕によりをかけた料理で有った。

「良い料理ですよ、ヒルダ姉さん」

「ええ……」

「この料理は、陛下の為にヒルダ姉さんが腕によりをかけた料理ですよ。」

でもこの事は知らないでしょう……この料理はBC兵器並の破壊力があることを。

そして、陛下をヴァルハラへお迎えしようとしているんですよ」

そして全ての風景が一瞬のうちに漂白されたのだ。危険きわまりないヒルダの料理の名前を耳にして、キスリング准将のトパーズ色の瞳が緊張をはらんだ。

「ハインリッヒ、あなたは……」

「ヒルダ姉さん、あなたを恥かしめるつもりは本意ではなかった。出来れば料理を作って欲しくはなかった。でも今更陛下にあなたの料理を食べさせない訳にはいかないからね。伯父上は悲しむだろうけど仕方ない」

「陛下ご感想はいかがですか？」

「此処で料理の為に殺されるなら、予の命数もそれまでだ。惜しむべき何物もない」

「けどヒルダ姉さんの為に陛下に食べさせる訳には行かないのですよ」

ハインリッヒはそう言いながら、自ら料理を食べようとする。

「ハインリッヒ、お願い未だ間に合うわ、料理を食べるのは止めて」  
「・・・ああ、ヒルダ姉さん、あなたでも困ることはあるんですね。僕の見るあなたはいつも颯爽としていて、眩しいくらい生気に溢れていたのに」

「静かに後数分だ。ほんの数分だけ、僕の手料理を握らせておいてくれ」

遂にハインリッヒはヒルダ料理を食べてしまった。

そして倒れるハインリッヒ。

駆けつけるヒルダ。

「ハインリッヒ、あなたは馬鹿よ・・・」

「僕は何かをして死にたかった。どんな悪いことでも、馬鹿なことでもいい。何かして死にたかった・・・ただそれだけなんだ」

ヒルダがハインリッヒを抱きしめながら、ハインリッヒがつぶやく。  
「・・・キュンメル男爵家は、僕の代で終わる。僕の病身からではなく、僕の愚かさによってだ。僕の病気はすぐに忘れられても、ヒルダ姉さんの料理を食べた愚かさは幾人かが記憶してくれているだろう」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4827y/>

---

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けませんシリーズの外伝や各種設定

2012年1月14日20時53分発行